

世界遺産を通して学ぶ 地域密着型医療の大切さ

閑静な住宅地を抜けると突如目の前に現れる高さ約22mもの鉄骨塔とレンガ造りの建造物。存在感に圧倒されるその姿のまわりに120名ほどの人だかりがあります。彼らは何をしているのでしょうか。

ここは福岡県大牟田市にある旧三池炭鉱宮原坑。江戸時代から採掘が始まり明治6年に官営化、この一帯は日本一の出炭量を誇る炭鉱の街として日本の近代化を支えてきました。石炭を掘り出す宮原坑、港まで運搬する三池炭鉱専用鉄道の鉄道敷跡、現役で稼働する三池港など、大牟田市の発展を象徴する一連の施設が今なお残る、歴史と文化に彩られた街。役所や地元企業、市民らの協力による炭鉱の保存活動が実を結び、今年の7月には「明治日本の産業革命遺産」としてユネスコの世界遺産にも登録されました。

この日集まったのは、帝京大学福岡医療技術学部の1年生たち。キャンパスのある大牟田市について学ぶ必修科目「郷土の歴史と文化と生活」の一環です。「この授業ではフィールドリサーチを行ったあと、グループに分かれて地域についての研究、発表を行います。授業を通して今まで知らなかった小さな世界を見ることで、より大きな世界

が見えてくるのです」。そう話すのは木村俊幸教授。この授業は大牟田市の発展の歴史を辿りながら、いま市が置かれている状況について考える機会にもなっています。「大牟田市は今では産業が衰退し、若い人が減って人口の3人に1人が65歳以上という割合になりつつあります。そのため医療や福祉の問題への街全体の取り組みが必要とされています。1年生なのでまだ自覚が乏しいかもしれませんが、近い将来、医療の現場へ出たときに、高齢者介護や認知症の方への対策など、社会の仕組みに要因がある問題に積極的にかわっていくこと、そして地域に密着して働くことの大切さを実感してほしいんです」。

実学を通してさまざまな医療系の資格取得をめざせる環境が整った福岡キャンパス。救急救命士コース1年生の松崎大幸さんは「自分が生まれ育った土地で、救急救命士として多くの人を助ける仕事に就きたいです。若い世代の力で地域に恩返しができたらいいなと、授業を通して思うようになりました」と熱い思いを語ってくれました。日本各地で地域と医療の結びつきが強くなり、広い視野で考えられる医療の専門家がひとりでも多く必要になることではないでしょうか。地元で働くことの使命感と喜び、そんな思いを新たにする学びの現場に立ち会うことができました。

feel TEIKYO ft
あなたにつながる帝京大学 撮影・岩澤高雄



帝京大学の
ガイドブック2016を
お届けします

「自分流」に学べる10学部30学科1短大。
さあ、興味の扉を開いてみよう！
請求先
☎ 0120-123361 (資料請求センター)
入試情報サイト
www.teikyo-u.ac.jp/applicants/